聖書のことば

あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。
（テサロニケの信徒への手紙一５章５節）

キリスト教会には、「イエス・キリストは再び来られ、世を裁き、救いを完成される」という「キリストの再臨の信仰」があります。今日お読みした一節は、キリストの再臨についてテサロニケの教会の人々が、自分たちに救い主イエス・キリストを証してくれたパウロ先生に質問をしたので、パウロ先生が答えている手紙の一節です。

今の私たちもそうですが、キリストの再臨を信じる者が必ず気になるのが、「何時キリストは来られるのか」ということでしょう。テサロニケの教会の人々もそうでした。それに対してパウロは、「教える必要がない」と答えました。イエス様ご自身が「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存知である」（マタイによる福音書 24 章 36 節）と言われています。何故なら、キリストの再臨は盗人のように突然にやって来るからです。それは、キリストの再臨は無い、あるいはあったとしてもずっと先のことで自分たちには関係ないと油断していると、まさにそこにキリストは来られる、ということです。世は着実にキリストを迎える日に向かって進んでいるのです。だから、キリストをお迎えするために備えていることが大事になります。そのために「何時なのか」と聞きたくなります。

最近また、都市伝説ブームで「～の予言によれば世の終末はいつ」というような話題が語られるようになりました。私の学生時代には「ノストラダムスの大預言」がブームになっていました。しかし、そのような話題は、「希望を持たない者からでてくる」とパウロは考えました。そこで、テサロニケの教会の人々に「希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために」と前置きして、キリストの再臨について語ります。

キリストは必ず来られます。しかしいつ来られるのかは分からない。突然起こる

ことです。その時のことを、わたしたちはどんなイメージを持っているでしょうか。戦争・飢饉・洪水・疫病その他の災厄が起こって人類は滅亡すると考えているのではないでしょうか。その時に、キリストが少数の人を救ってくれる。その中に自分は入っているだろうか？入るためにはどうしたらいいだろうか？いつまでに準備をしなければいけないのか？何をしておけばいいのか？こういった心配や間違ったイメージは「希望を持たない」者から出て、私たちを捕えようとし、怯えさせるのです。しかし、キリストを信じる者は違うのです。そのことを言い表した言葉が「あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません」という本日の言葉です。

「希望を持たない」者は、夜に属してます。この夜に属するということをこの後の箇所で「酒に酔う者」と言い換えています。希望がない様は、酒に酔っているようなものだというのです。心において不安に酔った中で勝手なことを語り、眠ってしまって肝心なことを知ろうとしません。だから、考えることは何でも破滅を想像させ、そこに人々を陥れようとします。しかし、イエス様を信じ、再臨を信じる者は、「光の子、昼の子」と呼ばれています。心において不安に酔わず、正気でいるということです。それが「希望がない」者と反対の姿、信仰と愛と救いの希望を纏った信仰者の姿なのです。

「神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです」（テサロニケの信徒への手紙一５章９～10節）。

わたしたちは、感染症に不安を覚え、水害に脅かされ、分断の亀裂を深くする世界に恐れを抱きます。その中で暗闇に属するように希望を持たない者、酔っているような者になって信仰を見失う弱い者です。キリストを迎え、救いをいただくのにふさわしい者でないのです。しかし、そんな私たちを神様は、「救いにあずからせる」と決めてくださっています。覆らない神様の決定です。そのためにイエス様は十字架にかかってくださいました。だから、私たちがキリストをお迎えする終末とは神様の約束された救いの完成の日、喜びの日なのです。